

日食と私

山下俊樹

私をはじめて皆既日食を体験してからはや19年になります。この間に私が行ってきたことに日食情報に書くほどの中味があるとは思いませんが、御好意により思うままを述べさせていただきます。

今世紀日本最後といわれた1963年、北海道北部での皆既日食を、自分にとっては最初で最後という気持ちで網走へ向かったのがはじまりで、昨年ソ連のタルマで迎えた日食がその1サロス後にあったわけでした。なぜ皆既日食に心をひかれたのか、いつから興味をもちはじめたのか自分自身をたどっていてもわかりません。ただ、まだ昨今程には日食に大勢の人々が関心をもち、参加はしない頃であり、私としてはいつしか伝えきくコロナの美しさをみたいという気持ちが、いつの間にか育っていたのだと思えます。何を見、どう調べるかなどということまでは考えも及ばなかったのが当時の状態であったというのが正直なところでした。にわかづくりの一にぎりの撮影装置だけをもって、ただ見たい、いや見ておきたい、そしてできれば見たものを恒久的な形にという意味で写真にとっておきたいという気持ちでした。今にして考えれば、あまりにも単純な姿勢かも知れませんが、でもこれはこれなりに自分としては悪くはなかったと思っています。自然のすばらしさを求め、その一端を自分の手で直接ふれる楽しみを味わうことにも意味はあり、そこには、理屈抜きのものも根底には大切だと思えます。

しかし、こうして向けられたコロナへの私の関心にとっては、網走のコロナは満足すべきものではなく、5年後の1968年、地人書館主催の日本アマチュア観測史上初の海外遠征ともいわれるソ連のアルマ・アタへの観測団に参加させていただきました。しかし皆既帯へは入れず、帰りの船中から思いは次の1970年のメキシコ日食へとつながっていったのでした。

ここまでは、いうなれば「見たい」の一心、いや「これぞ見た！」といえるコロナを見たい執念だったと思えます。

幾度かの皆既日食の中でも、私の脳裏に強く印象ついている一つは、こうした気持ちからもやはりメキシコ日食です。天気にも恵まれ、日食条件も良好で、なにはともあれ伝えきくコロナを本当に見たという実感でした。観測装置の方も、ソ連へは普通の小型望遠鏡を、メキシコへは携帯用をと、網走の時よりは変化してきました。学術上からいってどれ程有意義なのかはともかくとして、私なりにメキシコ日食では観測項目も増えました。それはやはり、かけ出しながらに網走を体験し皆既帯に入れなかったとはいえアルマ・アタを経て日食というものを自身でうけとめてきて考えられるようになっていたからでしょう。個人旅行でしたが、観測協力者として、私の家内と親戚の人の2人があったことも観測項目を増やすことができた原因でした。

よほど自動化しない限り、あの緊張した雰囲気の中で、しかも短い時間内に、一人だけで操作できる限度は、あまりにもわずかだと思います。1人でも協力者があれば、観測項目は、あるいは観測

能率は倍増されるといえます。

メキシコ日食の頃は、まだ日食情報のような観測者にとって有難いものではありませんでした。いくつかの情報を入手できはしたものの、現在のように何年も前からの完璧なものではありません。私が観測地として、プエルト・エスコン・デイドを選んだ理由の一つは、東京天文台などの観測隊と同じところをというところがありました。皆既日食観測旅行には、天気という、一か八かの賭けが必ずともないます。結果はともかくとして、事前の対策としては、やはり確率から判断する以外ないはずで、皆既継続時間をはじめとする日食そのものの条件を加えた総合判断の一つの寄りどころとして、かかる選択をした次第でした。

日食そのものとは少しはずれますが、好条件で見た日食ということと共に、メキシコ日食旅行は、私にとっては他にも思い出に残ることが多々ありました。はじめての海外個人旅行からくる、しかも未開地への旅行なるが故にのハプニングも少なからずありましたが、現地の人達のわれわれの歓迎も含めた、外国の裏街道的な面もかいまみることができましたし、加えていくばくかの援助金の関係もあり、(このとき個人旅行をしたのは、こうした別の旅行目的が付ずいていたためです。)アメリカ・カナダの学校と天文台訪問旅行が、思い出深いものにしました。2年前に、当時ソ連第1位のクリミヤの260cm等をみているとはいえ、当時世界最大のパロマーの5m、天文学発展に大貢献をしたかつての王者ウイルソンやヤーキース、そして現代の花形キットピーク等々、アメリカの天文界の一端が私にはすばらしくうつりました。キットピーク訪問前夜、半砂漠の中で待機中に見つけたコメットが、ベネット彗星であることを天文台の人にきいて知った等の思い出もあります。しかしこのときは、すでに観測装置は日本へ送り返し、一般用の小型カメラ1台のみしかなく、コメットの撮影は楽ではありませんでした。最低限の観測装置は常備すべきなのかも知れません。

メキシコ日食が終ってみると、3年後のアフリカでの、残された20世紀中最大といわれた日食がすぐに話題となってあがってきました。その前年の1972年、北極圏のアラスカ・エスキモー部落での日食観測団にも加わりました。メキシコで試みた全天写真を観測法を変えて行う等のことはしましたが、アフリカ大日食をひかえてのリハサールといった軽い気持ちで参加したためもあり、赤道儀ももたない軽装備でした。皆既中のスチル写真は成功していますが、不十分な体勢のまま少々欲張ったため、メキシコるときからはじめた8mmによる日食経過までは作動させられませんでした。決して無理な計画を立てないことという反省材料になったわけでした。

アラスカ迄は、日食以外に別の目的の付ずいたメキシコは別として、観測団に参加させてもらっていましたが、1973年のアフリカるときだけは少し別の考えからの個人旅行をするようになりました。理由は簡単、せっかく待ちに待った20世紀最大級の日食であるからには、可能な限り皆既継続時間の長いところへ行きたかったのです。最長のところでは、7分をこえたかと思いますが、実現可能なところとしての、モーリタニアのアクジュジュを選びました。

例のアフリカのかんぱつと飢きんでさわがれていた頃でした。事情が不明のことが多く、個人旅

行の手続も困難を極めましたし、万が一の事態の覚悟もしておかねばなりません。砂漠の入口や国境の川べりで野宿する等を体験したり、飢さんの救済募金を依託される等の付随的なことをともないながらの旅でもありました。そのかんぱつからくる砂塵のために、日食の方は好条件とはいえませんでした。でも私自身としては、様々な体験も含め、この西アフリカはメキシコと共にいってよかったですと思っています。メキシコ以来というより、網走以来、コロナのステル写真はカラーでした。測定にはモノクロの方がよいのは当然ですが、測定に重点をおくか、見覚えも考えるかの兼ね合いはむずかしいところです。このアフリカで、はじめてモノクロによるコロナのステルをとりいれました。そして、ニューカークとはいきませんでした。コロナの明暗の広さに対する対策の一つとして、コダックのXRフィルムによる撮影を試みました。

網走以来アフリカ迄、遅々とした歩みながらに、1回1回が新しい体験であり、新しい試みだったといえると思います。それは日食において、またその観測法において、そして旅行そのものについていえることだと思います。アフリカは家内と教え子の3人の個人旅行でした。そして、翌年1974年、はじめての南半球、西オーストラリア・オーガスタへ、今度は家内と2人だけの旅行になりました。勤務先の欠勤を最小にするための、まったくの日食目的だけの旅程をくむための個人旅行でした。はるばる外国旅行をするからには、あるいはまた天気が悪くて日食がみられなかったときのことを考えての、他の目的を含めた旅行は当然考えられ、またできることならそうしたいとも思います。しかし、たとえ日食がみえなくてもストレートで帰ってくる場合も時には割り切って考えざるを得ないと思います。勤務の関係、費用の点等から、どちらを選ぶかは、各人によって違い、また好みもあるでしょう。このときも幸い天気には恵まれた方で、日食と共に南十字星もはじめて見、最短日程のあわただしさの中にも、前年のアフリカの反動のようのにのんびりとしたオーストラリアを味わったのでした。

1976年、東オーストラリアの時、家内と2人でツアーに参加。はじめて曇りに出会い、観測不能でした。残念ではあったけれど、少くとも一度は味わっておくべきものかも知れないとも思いました。このときは、マゼラン雲がみやげになりました。

1979年はカナダのウインベッグへのツアーに参加、冬のカナダということに加え、私事になりますが、手術後の影響のまだ消え去らぬときで、荷物は観測器材は二次で、ほとんどが防寒対策でした。最高50℃のアフリカでは暑さからくるトラブルもありましたが、このときは寒さのため、カメラのモータードライブが動かなくなり、素手で暖めてやっと動き出す等もありました。耐寒処理を考えつつ、少々油断したのですが、万全をつくすのは、思いつくつかないの点だけではなく、費用・手続きの点も含め、大変なことだと思います。アラスカのときは白夜でしたが、今度はオーロラのみやげができました。

アフリカ迄とは違い、それ以後は多少情性のようにいったともいえなくはありません。1980年のインド・アンコーラへのツアーに参加。このときはコロナのステル写真のみにしぼり、モータードライブ・ワインダーで手間をはぶいたため、これ迄では最もしっかりと、内眼によるコロ

ナを味わうことができました。

そして、1981年再びソ連への、今度は百数十名の大ツアーに参加。アルマ・アタの時のこと、そして網走日食の一サロス周期後の日食であることは、偶然とはいえ、思いを新たにもします。毎回ではありませんが、このときも含めて、ときどきほぼ同一目的のため、2系統の光学系をつかっております。やはり予測しないハプニングによる失敗を避ける用心として、できるなら必要なことではないでしょうか。

アルマ・アタ日食の帰りの船の中で、観測方法についての討論がかわされました。それぞれの人の意見・気持ちもそれなりのものが理解できるつもりの中で、私はグループ共同観測の意見を主張したことを記憶しています。しかし、私がこれ迄にとって来たのは内容的にグループ共同観測ではありませんでしたが、2・3回の旅行を別とすれば、あえてそうしたのではなく、たまたまそうなったにすぎず、グループ共同観測が有効であることは、最近の諸氏の成果をみても十分立証されていると思います。ともあれ、私なりにいくらかなりとたまってきた資料を、これ迄にも試みてきた分析方法を今一度まとめて、見直しをする時期だと考えております。